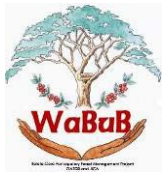


# WaBuB PFM News

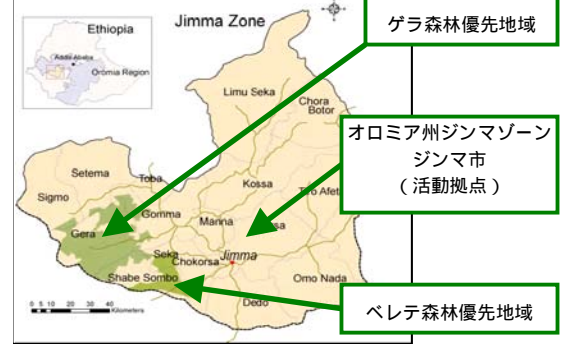
~ Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management ~



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2008年9月30日発行 (第22号)



## ラマダンとマスカル

我々の活動拠点であるジンマでは、イスラム教とエチオピア正教(古代エチオピアから伝わるキリスト教)が混在しており、若干、イスラム教徒の方が多いと言われています。9月から約1か月のラマダン(イスラム教徒による日の出から日没までの断食)が始まり、イスラム教徒のスタッフは、昼飯を食べに行くエチオピア正教徒のスタッフを横目で見ながら、昼はモスクへお祈りに行き、そのまま午後は無気力状態です。それでも、日没後の夜になると、毎晩がお祭りのように騒がしいですが...。26日の午後のこと、エチオピア正教徒のスタッフが少しずつ消えていきます。マスカル(エチオピア正教の祭日)の前夜祭に向け、ご馳走の準備をしなければならないとのこと。その日の自転車での帰り、聖歌を謳いながら行進するエチオピア正教徒の群衆に飲み込まれ、普段の落ち着きとは打って変わった熱狂の中をゆっくり歩きます。一方で、モスクからはラマダンの大詰めを感じさせる力のこもった説教が、大音量のスピーカーから響き渡ります。混沌とした音に囲まれ、改めて宗教や文化の多様性と、その違いを当たり前のように受け入れながら共生している許容力に感心させられました。

## 農業プロジェクト間による普及員(DA)合同研修 第2弾！！

エチオピア国内で実施中の JICA 農業関連技術協力プロジェクト2件、農民支援体制強化計画プロジェクト(通称 FRG)、および灌漑農業改善プロジェクト(通称 IFI)との合同による普及員(DA)合同研修を6月に実施(第19号参照)しましたが、今回、第2弾を FRG および IFI の各フィールドを視察しながら実施しました。

1日目は、まず IFI 活動の1つである小規模灌漑のサイトを訪れ、ビニルシートなどを利用したため池の実例を見学し、農民の反応を聞きました。「乾期でも水があることにより、商品価値の高い作物を栽培できるようになった」という声に対し、



小規模灌漑の実例を見学

WaBuB DA からは「大きなビニルシートは農民が購入できず、現実的でない...」というコメントが挙がりました。必ずしもきっちりしたため池でなくても、使い古しのビニルを利用したり、少量のセメントを混ぜるなど、地元の資源を利用しながら出来ることは幾つかあるはずですが、また、幾ら雨の多いベレテ・ゲラ地域でも、今年は例年に比べて乾期が長く、野菜が枯れてしまったフィールドスクールもありました。そうしたリスクを回避する手段として、小規模なため池の導入は非常に有効だと感じました。

2日目には、FRG が実施するアグロフォレストリー(樹木と農作物を組み合わせた土地利用)の試験地やモデル農家を見学しました。これまで教科書では見たことのあるアグロフォレストリーの実例を見て、「作物だけでなく樹木を同時に植えることにより、このように暑さが厳しい村でも年中木陰があり、土も肥沃になった...」という農民の説明を聞き、我が WaBuB DA も手ごたえを得たようです。これまでの WaBuB Field School (WFS)で目指しているのは、こうした有機農業やアグロフォレストリーの実施により、農地を拡大(森林への負荷)したりお金をかける(化学肥料の投入など)ことなく農業生産性を上げ、効率的な土地利用を持続的にやっていくことです。今後、普及教材の作成などを通じて、ベレテ・ゲラ地域にあったアグロフォレストリー技術の導入も一層図っていきたいと考えています。



FRGのDAによる劇の披露



1等を獲得した FRG DA によるポスター

最終日の3日目には、灌漑やアグロフォレストリーをテーマとしたポスターをグループで作成し、近郊の農民達による採点の結果、1-3等までを表彰しました。「どのような情報を、どのように配置し、読み書きのできない農民にわかりやすく伝えるか」を DA 同士で知恵を出し合い、絵や図を使って1枚の紙にまとめていきました。これまでのように試験場などから配布されたパンフレットをただ農民に読み聞かせるのではなく、必要な情報をフィールドの現状に即して取捨選択し、まとめあげ、農民のためになる知識・技術を分かり易く伝えることは、普及員にとって非常に重要なスキルであると思います。WFS をもっと効果的に活用するためにも、こうした教材作成に関するフォローアップも少しずつ取り入れていく予定です。

WaBuB は、現地オロモ語で(地域住民により組織される)森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFM は、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

## WFS 技術研修を実施

8月にファシリテーター研修を受けた新DA約50名と、選ばれた農民ファシリテーター約70名(第21号参照)を対象に、WFSの実施に必要な技術習得を目指した研修を実施しました。研修内容は、ベレテ・ゲラ地域の主作物であるメイズの他、各種野菜・果樹の栽培方法、コーヒーの病虫害対策、苗畑作りなど多岐に渡りました。また、今年はDAの要望に応じて、簡易な養蜂技術についても盛り込みました。

各テーマの講師はジンマ大学の先生や農業試験所の研究者達に依頼し、講義の他にも試験地の見学を合わせて行ったため、特に農民ファシリテーターからは質問が絶えず、いい刺激になったようです。コーヒーの栽培については、さび病と呼ばれる病虫害が発生した場合に、地元で入手できる材料を使った薬をどう調合し、コーヒーの木の根元部分にどのように塗布すればいいかを実習しました。コーヒーを主な生計としている村がほとんどであるだけに、こうした技術・知識の普及は非常に重要です。



コーヒーさび病への対策を熱心に聞くDAと農民

また、WFSで力を入れたい内容の1つが、苗畑の普及です。これまで農民にとってコーヒーや果樹の苗木は、政府系の苗畑から配布されるか購入することが普通であり、自分たちで生産するという意識はあまりありません。将来、各集落が苗畑を持ち、農民が分担して管理できるようになれば、手軽に自分たちの欲しい苗を入手できる他、生産した苗を他村の農民に販売するなど、新たな収入源にもつながる可能性があります。「苗木よりも野菜をやりたい!」と言うWFSがほとんどですが、苗畑の普及も上手に説明しながら普及していきたいと考えています。



苗畑は土の準備から!

参加者が特に興味を持っていたのが、簡易養蜂技術です。これまでほとんどの農民が伝統的な円筒形の養蜂箱(第2号参照)を使い、木の枝に括りつけて蜜の採取をしています。この方法では質のいい蜜が採れるものの、事故が非常に多いようです。参加者の集落で発生した伝統的養蜂に係る死亡者リストを作成したところ、約60名にも上りました。最も多い原因が、夜間の樹上での作業中(蜂の活動が夜に養蜂箱を取り出す)における墜落で、他に蛇に咬まれたという事例もありました。かと言って、政府が普及に努めている据置型の改良養蜂箱(日本とほぼ同じもの)は未だ値段が高く、農民には手が出ません。そこで、地元で豊富にあるユーカリの木で枠を作り、あとは小枝と釘を組み合わせることで、コストを少なく、伝統的養蜂以上に量を確保できる簡易据置型の養蜂箱をどう作り、どう管理すればいいか、養蜂に関わるNGOスタッフに講義をしてもらいました。こうした養蜂技術もWFSで取り入れて比較試験を行う中で、改良・普及に繋げることが期待できます。



地元の材料を使って簡易な養蜂箱を作ってみよう!

## コーヒー品質研修の実施

コーヒー認証に参加する農民およびDAを対象にコーヒー品質向上のための研修を実施しました。コーヒーの品質は、収穫、乾燥、貯蔵で決まります。そこで、本研修ではコーヒーの専門家(輸出業者のスタッフ)を招聘し、これらの方法についてスライドによる講義を行うとともに、竹製乾燥ベッドの作成方法の現地研修をしました。乾燥ベッドで風通し良く清潔に乾燥させることはコーヒーの品質向上に特に重要です。

昨年はコーヒー認証対象村4村での実験の実施でしたので、乾燥ベッド用にコーヒーを乾燥させやすい丈夫な鉄製メッシュをプロジェクトから提供しました。本年は本格的に認証を開始し、対象を21村と拡大し対象農家が1800戸を超えるため、各農家で乾燥ベッドを用意するように呼びかけました。鉄製メッシュに代わる安い材料と言えば自生の竹です。プロジェクト終了後の継続のためにも、地元で採集できる材料の利用は重要です。

## プロジェクトの中間点を迎えて

2006年10月に始まったフェーズ2も早いもので2年が経過しました。開始当初に組織化されていたWaBuBは2集落のみで、今後、どのようにしてベレテ・ゲラ森林優先地域内の43村でWaBuBを展開し、また生計向上活動を実施していくべきか・・・カウンターパートとともにアイデアを出し合いながら、日々議論を重ねていたことを思い出しています。2年が経過した今、29集落でWaBuBが設立され、WaBuBフィールドスクールや森林コーヒー認証プログラムといった活動も実施され、具体的な成果も見えつつあります。また、これらの活動を村レベルで実施している村落開発普及員や森林官の数は100名を超えるまでになりました。「森を守る」=「生活が良くなる」という方程式に基づいた活動は、着実に村レベルで広がっています。

その上で、これからプロジェクト終了までの2年間の課題は、上記の活動を継続しWaBuBによる森林管理活動を他集落へ普及していくことに加え、住民(WaBuB)と行政(郡)が協働で参加型森林管理を継続していけるような組織体制の強化、各集落(WaBuB)における森林管理活動実施のリーダー格となる農民の育成(WFSのファーマー・ファシリテーター等)、村落開発普及員の中からWaBuB組織化やWFSに関する研修やトレーニングの実施を担うことができる核となる人材の育成といった、現地のリソース・人材によるWaBuB型森林管理活動の継続に向けた体制づくりをサポートしていくことだと思います。一朝一夕に成せる課題ではありませんが、貴重なベレテ・ゲラ森林を守るために、そして、そこへ住む人々が森の恩恵を受け生活が豊かになっていくことを目指して、更なる一歩を踏み出す時期にきている気がしています。

(短期専門家(チーフアドバイザー)西村 勉)